

翻訳 シャーロット・パーキンズ・ギルマン「黄色い壁紙」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): The Yellow Wallpaper, Charlotte Perkins Gilman 作成者: 石木, 利明 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7216

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



翻訳 シャーロット・パーキンズ・ギルマン「黄色い壁紙」

石 木 利 明

【キーワード】黄色い壁紙、シャーロット・パーキンズ・ギルマン、The Yellow Wallpaper、Charlotte Perkins Gilman

黄色い壁紙

シャーロット・パーキンズ・ギルマン

石木利明 訳

ジョンやわたしのようなただの庶民が、昔から代々受け継がれてきた大邸宅を一夏借りられるなんて、ほとんどありえない話だ。

植民地時代の館、先祖伝来のお屋敷——わたしが付け加えるとしたら、「幽霊屋敷」かしら。そうだったら、ロマンティックな至福の極みを味わえるのだけど。でも、そんなドラマティックな運命なんてそうそうあるものじゃないわね。

それでも、ここには何か普通ではない雰囲気漂っているときっぱり断言できる。

そうでなければ、どうしてこんな破格の安さで貸し出されているのか。それにこんなに長い間借り手がいなかったというのは？

翻訳 シャーロット・パーキンズ・ギルマン「黄色い壁紙」

もちろんジョンはそんなわたしを馬鹿にする。まあ、結婚生活というものはそういうものだけれど。

ジョンは極めつきの現実主義者だ。何かを信仰することに我慢がならないという人で、ましてや迷信などには強い怖れを抱いている。とにかく触って感じ目で見てとれ数字で表すことができないうなことの話は、なんであれあからさまに嘲笑する人なのだ。

ジョンは医者なのだが、ひょっとするとそれが——こんなことは生きている人間にはもちろん口が裂けても言わないが、これを書きつけているのは告げ口することのない死んだ紙なので全く安心だわ——ひょっとするとそれがわたしの回復が遅れているひとつの理由なのかもしれない。

なにしろ、彼はわたしが病気ではないと思ってる！

だとしたら、どうしたらいい？

名の通った医者でありかつ自分の夫である人が、友人や親戚たちに、一時的神経の抑鬱——軽いヒステリー傾向——であるというだけで他に問題は全くないと保証している。そんな場合、どうしたらいいとい

うの？

兄もやはり評判のいい医者なのだが、同じことを言っている。

だから、リン酸塩だか亜リン酸塩だか——どっちでもいいけど——を服用し強壯剤を飲まなければならぬ。旅、いい空気、運動は勧められてはいるけれど、よくなるまで「働くこと」は厳禁とされている。

自分としては、あの人たちの考えに承服できない。

自分としては、わくわくする気持ちにしてくれるような、気晴らしを与えてくれるような、性に合った仕事をする方がわたしにとっていいのではないかと思う。

しかし、どうしたらいい？

かれらが禁じているにもかかわらず、こうして少しものを書いてみた。しかしこれがものすごくしんどく感じる。隠れてこそ書かなければならないからだ。見つかってしまったら強烈な反対に会ってしまう。

わたしのような病状の場合、いろいろ反対されることはもっと少なく、逆に人づきあいや刺激を多くしてもらえれば——などと思うことがある。しかし、ジョンによるとわたしができることで最悪なことというのは、自分自身の病状について考えることなのだそうだ。告白するけれど、こう言われるといつも気分が悪くなってしまう。

だからそれは置いておいて、この家の話をしよう。

なんて美しいお屋敷！ 周りに他の家はなく、道路からずっと奥まったところに建っている。村からはゆうに三マイル離れた場所。わたしが思い出すのは本の中で読むようなイギリスのお屋敷。生垣、石造の塀、鍵のついた門、庭師や使用人たちの住む何軒もの小さな住宅がある。

そして甘美なお庭！ こんな庭を見るのは初めて。大きくて木陰がたくさんできている。柘植の生垣で縁取られた小径がたくさんあって、ところどころに葡萄棚の東屋が並び、その下にはベンチが据えられている。

温室もいくつか使われていたようだ。今はすべて壊れてしまっているけれど。

なにか法律上のトラブルがあったのだ、とわたしは思う。なにか相続人とか共同相続人だとかが絡むような。とにかくこの屋敷は何年も空き家になっていたのだ。

そんな事情だとすると、せっかくわたしの感じた靈感が台無しになってしまう。でも気にしないわ。この家には奇妙な何かがある。わたしは感じる。

ある月夜の晩、ジョンにそんなことを言ったら、隙間風のせいじゃないのかと言って窓を閉めて、おしまい。

ジョンが無性に腹立たしくなることがときどきある。こんなにいらんすることはこれまでなかったことだ。これも神経の症状のせいなんだろうか。

でも、そんなふうに感じているとしたら適切な自己制御を怠っているのだとジョンは言う。だから苦勞して自制心を保っている——少なくともジョンの前では。これがまたものすごくわたしを疲れさせる。

わたしたちの部屋が全然好きになれない。階下に、ペランダに出られ窓が全部薔薇に囲まれていて、古風でとてもすてきな更紗織のドレープが下がっている部屋があって、そこを寝室にしたいと言ってみただが、ジョンは全く耳を貸そうとしなかった。

窓はひとつしかないし、そもそもベッドをふたつ置くスペースもなく、彼の寝室を別にしようとしても近くに適当な部屋がない、と言うのだ。

ジョンはとても優しくわたしを気にかけてくれて、特別な指示がなければわたしはピクリともしないで済むようにしてくれている。

毎時間決められた処方を施されていて、わたしに一切の気遣いをさせないようにしてくれている。だから、それをもっとありがたいと思わなければ、感謝の念が足りない卑しい人間のように感じてしまう。

ここへ来たのはひたすらわたしのためであって、だからわたしは完

壁な安静を保ち、きれいな空気を吸えるだけ吸わなければ、と彼は言う。「運動するとなると体力次第だし、食事は食欲があるかによるけれど、空気はね、四六時中吸っているわけだからね」だから、わたしたちは最上階の育児部屋を寝室にしたのだ。

広くて風通しの良い部屋で、この階のほぼ全部を占めている。全方角に窓が付いていて、だから空気も日の光もたっぷり入ってくる。最初は育児部屋、その後お遊戯室、さらには運動部屋として使われたんだらう、わたしの見立てでは。というのも、窓には子供のことを考えて鉄格子がはめられ、壁には輪っかやらなんやらが埋め込まれているから。

ペンキも壁紙も、まるで男子校で使われていたかのようになっている。ベッドの枕元の壁紙は、だいたいわたしの手の届くくらいまでのところが何箇所も、そして部屋の反対側の壁の下の方は一箇所だけ大きく剥がされている。壁紙がこんな酷いことになっているのを今までに見たことがない。

のたくるように広がるそのけばけばしい模様のひとつとつても、そこには芸術上のありとあらゆる罪が詰め込まれている。模様を辿っていく目をまごつかせるほどにそれはくすんでいるが、一方で、どんな模様か見極めようとする気持ちに苛立たせながらそれを駆り立てるように際立っていてもいる。不恰好で不明瞭な曲線を少し辿っていくと、それは突如として自殺してしまう。とんでもない角度で飛び出して自壊してしまうのだ。そのわけのわからなさは見たことも聞いたこともない。

色は不快で、ほとんど吐き気を催させる。燻った不潔な黄色で、ゆっくりと向きを変える太陽の光のせいだろうか奇妙な色褪せ方をしている。あるところはくすんでいるけれどけばけばしいオレンジ色で、あるところは気持ちの悪い硫黄のような色合いをしている。

なるほど子どもたちは嫌がったはずだ！ わたしだってこの部屋にずっと暮らすなんて御免蒙りたい。

ジョンがやって来た。これをしまわなければ。わたしに一語たりとも書かせたくない人だから。

ここへきて二週間が経った。最初の日以来、ずっと書く気が起こらなかった。

今、わたしはこの身の毛もよだつような育児部屋の窓辺に座っている。好きなだけこうして書くことを妨げるものは何もない。体力不足を除いては。

ジョンは終日外出している。診ている患者の容体が重い時には帰らない夜もある。

わたしの症状が重くないのはありがたいことだ！
でも、神経の不調というのはすごく憂鬱なものではある。

ジョンはわたしがどれだけ辛い思いをしているかわかってくれない。苦しむ理由などどこにもないというのが彼の確信なのなもの。

もちろん、ただ神経過敏になっているせいなのだ。どんなやり方でもいいから自分の義務を果たせないというのは本当に辛い。

ジョンの助けになりたい、他に得られない安らぎと慰めになりたいと思っていた。それに比べてどうだろう、ここでわたしは彼の重荷でしかなくなってしまう。

やれることはほとんどなく、それをやるのもどんなに大変なことか誰もわかってくれないだろう——着飾ったり、お客さんをもてなしたり、いろいろ切り盛りしたりすることさえも。

メアリーが赤ちゃんに優しくしてくれるのは幸せなことだ。ああ、かわいい赤ちゃん！

でも、あの子と一緒にいてやることのできない。それがわたしの神経を苛立たせる。

ジョンはこれまでの人生で神経過敏になったことなど一度もないのではないか。この壁紙についてだって、わたしを馬鹿にしてとりあってくれない。

最初は壁紙を張り替えてもいような素振りだったが、その後、わたしは壁紙に翻弄されているのだ、神経を患っている人にとってそういう空想に身を委ねることほど悪いことはないのだと言いつ出した。

かりに壁紙を張り替えたら、その空想が今度は重いベッドへと向かい、次には格子のはまった窓に、また次には階段の一番上の扉に、などと際限なくなると言うのだ。

「あのね、このお屋敷は君にいい効果をもたらしている。それに、いいかい、たった三ヶ月の賃貸期間に改装するなんてしたくないんだ」「じゃあ、階下の部屋にしましょうよ。下には素敵な部屋がいくつもあるわよ」

そうすると彼はわたしを両腕で抱きしめて、困った子ちゃんだなあ、とわたしを呼び、そんなに階下がいいんだったら、じゃあ地下室にしようか、おまけに壁は真っ白な漆喰塗りにしてもらったっていいんだよ、なんて言われた。

まあ、しかし、ベッドにしても窓その他にしても、彼の言うことにも一理ある。

ここは広々として快適なわけだから、誰にとったって望ましい部屋なのだ。それに、もちろん、単なる気まぐれで彼に不快な思いをさせるような愚かなことはしたくない。

本当はこの部屋がだんだん気に入ってきている。あの忌まわしい壁紙を除いては、だけれども。

ひとつの窓から庭が見下ろせる。深い陰のできた神秘的な東屋、咲き誇った古風な花々、灌木、節くれだった木々。

別な窓からは入江の美しい景観が楽しめる。そこにはこのお屋敷専用の小さな船着場がある。木陰の落ちている美しい小径がお屋敷からそこへと通じている。ここから見える無数の小道と東屋に人々の歩く姿をいつも空想してしまうのだが、ジョンからそんな妄想は一切しないようにと警告を受けた。想像力を駆け巡らせ、いつもお話を拵えるようなことばかりしていると、わたしのような神経耗弱は止めどもな

くありとあらゆる妄想を生み出してしまふこと必至なのだ、だから意志と分別を使ってそうした傾向を抑えなければならぬというのだ。だから、そのように努力しよう。

もしちょっと物を書くことができるくらい元氣であったならば、押し寄せるいろいろな思いにはけ口を与えて安らげるのに、と思うことが時々ある。

しかし、やろうとするとすごく疲れてしまふ。自分のやっていることになんの助言も得られない、一緒に協力してくれるような人もいない、というのは、なんともやる気が起きないことだ。

本当に良くなったなら、いとこのヘンリーとジュリアに何日か来てもらおうとジョンは言う。ただし、今この状況であの刺激的な人たちにわたしを囲ませるくらいなら、わたしの枕の中に火花をいっぱい詰め込んだ方がまだましなのだそうだ。

ああ、早く良くなれないかな。でも、そういうことは考えちゃいけなかったわね。この壁紙は、いったいどんな悪意ある影響力を発散しているかを自ら意識しているかのようにわたしには見える。

模様が折れた首のようにだらりと垂れ下がり、ふたつの膨らんだ眼球がさかさまになってこちらを見つめている、それが繰り返し現れる場所がある。

その厚かましきとしつこさ、もういい加減にしてほしい。生首たちは上下左右に蠢き、瞬きしないおかしな眼が至る所から見つめてくる。並んで貼られた二枚の壁紙がきちんと揃っていないところが一箇所あって、そこでは眼球たちは上下にずれながらつながらている。

生命のないものにここまで多くの表情が見えるというのはかつてなかった。でも、そういうことがあるというのはだれもが経験して知っていることね！ 思い返すと子どもの頃、目覚めたまま横になって、

何も掛かっていない壁や装飾のない家具から、普通の子どもが玩具屋
さんで得られる以上の楽しみと恐怖を引き出していたものだった。

部屋の大きな古いチェストの取手がどんなに優しいウイंकを投げ
かけてくれたかを覚えている。それに、頼れるともだちのようにいつ
も思える椅子が一脚あったわ。

他の物全部が獯猛で恐ろしく見えたとしても、その椅子にいつも飛
び乗ったら安心を覚えたものだった。

この部屋の家具は不調和という形容がぴったりなのだが、これは全
てを階下のおちこちから運びあげなければならなかったからだ。この
部屋を遊戯室として使うことになった時、育児用の物は全部運び出し
たのだろう。がらんとしたお遊びの部屋を与えられたこともただか
ら、無理もない、わたしがこれまで見たこともないような破壊の跡を
残したわけだ。

壁紙は、前にも書いたように、おちこちで剥がされているけれど、
剥がれていないところは兄弟の仲も敵わないほどべったり張りついて
いる。憎しみと執着が同居していたに違いない。

床は引つ掻かれ、えぐられ、裂かれていて、漆喰そのものもおちこ
ちでほじくり出されている。最初この部屋にそれしかなかった大きく
重いベッドは、あたかも戦禍を何度も潜り抜けてきたかのような様だ。

でも、こんな荒廃状態だって全く気にならない。問題はただ壁紙。

あら、ジョンの妹が来るようね。とてもいい娘よ。わたしのことを
すぐく気にかけてくれて。彼女に書いているところを見られないよう
にしなければ。

彼女はそれはもう完璧で熱心な家政婦で、それ以上の職業など全く
望んでいない。わたしの具合を悪くしているのは書くということなの
だと彼女が考えているのは間違いない。

でも、彼女が外出してその姿を窓から遠くに見えるような時、わた
しの執筆の時間となる。

一つの窓からは美しい木陰のできた曲がりくねった道を見渡せる。

別の窓から見晴らせる田園風景は、楡の大木やビロードのような草原
がいっぱいに広がって美しい。

この壁紙には色合いの違う一種の地下模様がある。この模様にはと
りわけいらいらさせられる。というのは、それはある種の光が当たっ
ている時にしか見えず、そういう場合でもはっきりとはしていないか
らだ。

しかし、太陽の当たり具合のせいで色褪せていないところに、奇妙
で癩に触るような、はっきりした形をしていない姿が見える。それが
間抜けでどぎつい外側の模様の背後にこそこそ隠れ回っているみたい
なのだ。

妹が階段を登ってきた！

さて、七月四日が終わった！ お客はみんな帰り、わたしはくたく
たになっている。ジョンは、少数者だったら人に会うのもわたしにとっ
ていいことかもしれないと考えて、母とネリーとその子どもたちに一
週間来てもらった。

もちろんわたしは一切なにもしなかった。ジェニーが今はすべての
世話をしてくれている。

しかし、それでもやっぱり疲れてしまった。

もっと早く回復しなければ、秋になったらウィア・ミッチェル先生
の診察を受けさせるとジョンは言っている。

でもわたしは絶対行きたくない。彼の手にかかった友人の話だと、
彼はジョンや兄とそっくり、いやさらにその上を行く人なのだそうだ。

それに、そんな遠くまで行くのはそれだけで大仕事だ。

なにかをやりに始めようとするのが全て価値のないことのように感
じられ、すぐ不機嫌で怒りっぽくなってきている。

つまらないことに涙がでてくる。それも始終。

もちろんジョンがいる時、ジョンでなくても誰かいる時には泣いた
りしない。ひとりになった時の話よ。

このところひとりになることが多い。ジョンは診ている患者の容体が重い時に町に留め置かれることがしょっちゅうだし、ジェニーは優しくわたしがひとりしておいてほしい時にはそうしてくれる。

だから、ちょっと庭の中やあの美しい小径を散歩したり、薔薇の咲いたポーチの下に座って寛いだり、多くの時間はこの階上の部屋で横になつたりして過ごしている。

実はこの部屋がだんだん好きになってきている。壁紙にもかかわらず。いや、ひよっとすると壁紙のおかげで、なのかも。

この壁紙がわたしの心から離れない。

この大きな動かせないベッド——釘付けされているんだと思う——の上に横になって、何時間もその模様を辿っていく。これがまた体操みたいに体に効くのよ、本当に。そうね、剥がされていない向こうの隅の一番下から始めると、その意味の見えない模様を辿ってある種の結論に到達しようという決心を、いつの間にか千回も重ねている。

デザインの原理はちょっと知っているつもりだけど、この模様の配列は、放射でもなく、交替でも左右対称でもなく、わたしが知っている他のどんな法則にも従っていない。

もちろん、壁紙一枚の幅ごとには模様は繰り返されるのだが、それ以外に反復があるとは言えない。

ある見方を見ると、それぞれ壁紙一枚は隣と関係なく独立していて、その中の膨らんだ曲線と装飾——振顛譎妄を発症した「劣悪なロマネスク模様」とでもいうような——が愚かで孤立した縦長の柱の中で上下によたよたと進んでいっているように見える。

別の見方を見ると、それらは斜めにつながっていて、のたくるような輪郭線は視覚的恐怖を覚えるような斜めの大波となって押し寄せる。大量の海藻が怒涛の中でもがいているようだ。

全体は水平方向に進んでもいる（少なくともそう見える）が、その方向に進む規則性を見極めようとするとへとへとになってしまう。

横長の壁紙が带状装飾として使われていて、これがまた見事に混乱

を増幅させている。

部屋の片隅にほとんど無傷になっているところがあるのだが、そこでは、異なる窓から差し込む交差光が弱まって低く入ってくる日の光がそこに直接当たる時間になると、放射模様が見えてくるような気がする——果てしなく続くグロテスク模様が共通の中心から生まれ、どれもこれも同じような錯乱状態で勢いよく飛び出していく。

これを辿るのは疲れる。少し昼寝しよう。

なんでこんなことを書かなければいけないのだろう。

書きたくない。

書けるような気がしない。

ジョンだったら馬鹿馬鹿しいと思うことはわかっている。でも、感じたり思ったりすることを何らかの方法で言わなければならぬ、絶対に——それがわたしに大きな安堵を与えてくれるから。

でも、安堵よりも大変さの方がだんだん大きくなってきている。一日の半分はひどい倦怠感を感じて、ずっと横になっている。

体力の消耗がいけないということで、わたしは鱈の肝油や強壯剤やらを摂らされている。エール、ワイン、レアで焼いた肉はもちろん言うまでもない。

ああ、ジョン！ わたしをととても優しく愛してくれている。だからわたしが患ったままにすることに我慢ならないのだ。先日彼と本当に真剣に筋道の立った話をして、いとこのヘンリーとジュリアのもとを訪れることをどんなに許してほしいと望んでいるかを伝えようとした。

しかし、行けるわけないだろう、行っただとしてもつわけがないと彼は言った。わたしはそれに対してきちんと反論することはできなかった。なぜって、そうする前に泣き出してしまったから。

頭を働かせることがすごく大変になってきている。神経衰弱のせいよね、きっと。

ジョンがわたしを両腕で抱いて寝室まで運び上げ、ベッドに寝かせて頭が疲れてしまうまで本を読んでくれた。

わたしは彼の最愛の人、彼の癒しになってくれる存在で、彼の全てなんだ、だから彼のために自分の体を大切にしてくれなくていいくちやならないんだよと彼は言った。

彼が言うには、わたし以外のだれもこの状態から救い出してくれる人はいないのだから、意志と自制心を使って、愚かな妄想が暴走しないようにしなくてはならないのだ。

ひとつ慰めがある。赤ちゃんは元気で幸せに過ごしていて、なにしろ忌まわしい壁紙のこの育児部屋を使わなくて済んでいる。

もしわたしたちが使っていなかったら、あの幸せな子が使うはめになっていたかもしれないのだ！ それを免れたのはなんと幸運なことか！ もちろん、そんなことがあると、わたしの大事な子、あの感じやすい小さな子にこんな部屋を使わせるようなことはしないけれども。

前は考えたこともなかったが、ジョンがわたしにこの部屋を使わせ続けたのは結局よかったということだ。赤ちゃんよりわたしのほうが、この部屋に耐えることが遥かに容易なことなんだから。

もちろん、こんなことはけっしてあの人たちに言うことはしない。そんな馬鹿じゃない。でも、相変わらずわたしの目は壁紙を見つめ続けている。

あの壁紙には、わたし以外の誰にもわからない、この先もずっとわからないはずのものが存在している。

外側の模様の背後におぼろげな形が日に日にはつきりと見えてくる。それは常に同じ形なのだが、その数がすごい。

それは模様の背後で屈み這い回っている女のように見える。本当にいやらしい。ジョンがわたしを連れ出してくれないかな、とまたもや考え出してしまふ。

わたしの症状について彼と話をすることはとても難しい。彼はとても賢明だから。それにわたしをとても愛してくれているから。

それでも、昨晚やってみた。

月が出ていた。月の光が、まるで昼間に太陽の光が入り込んでくるように部屋中に差し込んでいた。

ときどき月光が気持ち悪く感じることもある。すごくゆっくりと這うようにして、次々と別な窓から忍び込んでくる。

ジョンは眠っていて、起こしたくなかったので、月光が波打つ壁紙を照らすのをじっとして見つめていると、しまいにぞくぞくとしてきた。

ぼんやりとした背後の姿が模様を揺さぶっているように見えた。まるで外に出たがっているかのように。

そっと起き上がって、壁紙が本当に動いているのか触って確かめに行って、戻ってくるとジョンが目覚めていた。

「なんなんだい、お嬢ちゃん？」彼が言った。「そんなふうには歩き回っちゃだめじゃないか、風邪ひいちゃうぞ」

話をするいい機会だと思ったので、本当はここに來てから良くなっていない、ここから連れ出してくれないかなと思っっている、と彼に伝えた。

「おいおい」彼は言った。「あのね、ここはあと三週間で引き払うんだよ。その前にどうして出て行くっていうんだい」

「家の修繕も済んでないし、すぐに町での診療を止めて帰ることなんてたぶんできない。君が危険な状態だというんなら、もちろんそうできるし、そうするつもりさ。でもね、君は本当に良くなってきたいるんだ。君自身がわかるかわからないかは別としてね。だってね、医者なんだよ、僕は。だからわかるんだよ。肉付きも良くなってきたし、顔色も良くなっている。食欲も出てきたし、前と比べてずっと安心してているんだ」

「ちっとも体重は増えていないわ」私は言った。「ここに來たばかりの頃より減ったくらいよ。食欲だって、あなたと一緒にいる晩にはまだいいかもしれないけど、あなたが出かけた朝にはまた落ちてしまうのよ！」

「このか弱き心に祝福あれ！」彼はわたしを抱きしめて言った、「彼女が満足するまで病気にしておいてあげましょう！でもね、時間を無駄にしないで今は寝よう。続きは朝になってからだ」

「じゃあ出て行かないわけね？」わたしは憂鬱に言った。

「あのね、どうしてぼくがそんなことできるっていうんだ？ たった三週間なんだよ。その後、ジェニーが家に戻る準備をしてくれている間、数日旅行しようじゃないか。間違いないよ、君は良くなっているって！」

「体の方はね——」わたしは言い始めてすぐにことばを飲みこんだ。というのも、彼はちゃんと座り直してわたしをとめて険しい非難する目で睨んだので、次の句が出てこなかったのだ。

「ねえ、君自身のためなのはもちろんだけど、僕のために、そして子どものためにも、お願いだから一瞬でもそうした考えを心の中に滑り込ませるようなことはやめてくれないか。君のような気質にとってそれほど危険で魂が奪われてしまうようなことはないんだ。それは間違った、馬鹿げた空想なんだ。僕がそう言っているのに、医者としての僕を信じられないのか？」

だから、もちろんわたしはこの問題についてそれ以上何も言わず、程なくしてわたしはベッドに入った。彼は、わたしが先に眠ってしまったと思っていたようだが、実はちゃんと目を覚ましていて、あの表の模様と後ろの模様が本当に一緒に動いているのか、それとも別々に動いているのかを見定めようと何時間も横になって目を凝らしていたのだった。

日の光が当たっていると、このような模様には連続性が欠如し、法則は無視されていて、それが正常な精神を常にいらだたせる。

その色は、もうたくさんだというほど醜く、いい加減で、腹立たしい。一方その模様は拷問のように責めさいなむ。

完全に把握したと思っても、先を辿っていかうとし始めた途端、そ

れは後ろに宙返りして、ああまた元に戻ってしまう。顔を平手打ちし、殴り倒し、踏みつけてくる。まるで悪夢。

外側の模様はけばけばしいアラベスク模様で、なにかのキノコを思い起こさせる。毒キノコが次から次へどこまでも数珠繋ぎになって芽を吹き果てしなく渦巻いている様を想像できるとしたら、そうね、そんな感じかしら。

そんなふうになる、時には。

この壁紙にはひとつはつきりとした特徴がある。これはわたし以外のだれも気づいていないようだけど。それは当たる光が変わるとそれに変化するという特徴。

太陽が東の窓から差し込んでくると——わたしは真っ直ぐ部屋の奥まで届くその日最初の光が入ってくるのをいつも注意して待っている——あっという間に変わってしまう。その速さは全く信じられないほど。

だからわたしは常に監視している。

月の光の下では——月夜には月光が部屋を一晚中満たしている——これは同じ壁紙とは到底思えない。

夜には、どんな光——黄昏時の薄明かりでも、蠟燭の灯り、ランプの灯りでも、そして最悪なのが月の光のだけ——が当たっても、それは鉄格子へと変わる！これはもちろん外側の模様のこと、こうなると、背後にいるあの女の姿はこれ以上ないというくらいはっきりと見えてくる。

後ろに現れるぼんやりとした下地模様が何なのか、長い間わからなかった。しかし、今やそれがひとりの女だということは間違いない。

太陽の光の下では、彼女は抑えつけられ大人しくしている。彼女をそんなに鎮めているのは壁紙の模様の力なのか。全く訳がわからない。そのせいで、このわたしも静かにさせられている、何時間も。

このところずっと横になっている。ジョンはいいことだ、できるだけ眠ったらいいと言う。

実際毎食後一時間わたしは横になる習慣づけを始めた。

これは間違ひなくひどい習慣だわ。だってわたし、寝てないもの。ただ、狡猾さは身につくわね。目が覚めているなんてみんなには言わないわよ。まさか！

実はジョンのことがちょっと心配になってきている。

彼の様子がとても奇妙に見える時がある。ジェニーさえも不可解な表情を浮かべる。

時々気づくことがある、科学の仮説がひらめくみたいに、それは壁紙のせいかもしれないと。

わたしが見ていることを気づかれずにジョンの様子を観察してきた。全く他意がないというような言い訳をしながら突然部屋に入ってきたりするのだが、彼がなんと壁紙をじっと見ているところを幾度か見つけたことがある。ジェニーも同じ。一度なんか彼女が壁紙に手を置いているところを見た。

彼女はわたしが部屋にいることを知らずにいた。だから、静かな、とても静かな声で、これ以上ないというくらいに抑えた調子でこう言っていた、いったいあなた壁紙になにしているの、と。彼女はまるで盗みを見咎められたみたいに振り返って、とても怒った表情で、どうしてそんな怖がせるようなことをするのかと言った。

そして、壁紙に触れるとなんでも汚れてしまう、黄色い染みがわたしの服にもジョンの服にもついていて、だから二人とももっと注意してくれないと、と言ったのだ。

悪意などないというふうに関こえない？ でも、彼女が実はあの模様をじっくりと観察していたことをわたしは知っている。でも、わたし以外の誰にも模様を判読させない、絶対に。

生きていることが、前よりずっとずっと面白くなってきた。だって、期待するもの、楽しみにして待つもの、見守るものが今のわたしにはある。食欲がでてきたし、気分も落ち着いてきた。

ジョンはわたしが良くなってきてすごく嬉しいようだ。この間なんかは、ちょっと笑いながら、壁紙はそのまんまなのに元気になってきているみたいじゃないなんて言った。

わたしは笑ってそれを受け流した。それは壁紙のおかげなのよ、なんて彼に言うつもりは毛頭ない。そんなことを言ったら馬鹿にされるだけだ。いや、そんなこと言ったら、ひょっとしてわたしをここから連れ出したくなるかも。

わたしはここを去りたくない、それを見出すまでは。あと一週間ある。それだけあれば十分だと思ふ。

ますます気分は良くなってきている！ 夜はあまり寝ていない。模様の展開を見るのがとても面白いから。そのかわり昼間はぐっすり眠れる。

昼間、模様はつまらないし、ややこしい。常にキノコが新しく芽吹き、それまでなかった黄色の色合いがそこいらじゅうに生じてくる。数えられないほどの数。一生懸命数えてはいるのだけれど。

これほど奇妙な黄色ってあるだろうか！ これまで見てきた黄色いものを全部思い起こさせる——でも、金鳳花きんぽうけのような綺麗な黄色じゃなく、古く不潔で腐った黄色いもの。

しかし、この壁紙には色とはまた違った特徴がある——それは臭いだ！ わたしたちが最初この部屋に入ってきた瞬間にわたしは気づいた。ただ、空気も日の光もたくさん入ってくる時はそんなにひどくはなかった。ここ一週間は霧と雨が続いていて、窓を開けていようとしまいと、その臭いがする。

それは家中を這い回っている。

食堂をうろついたり、客間でこそこそしていたり、玄関ホールに隠れ、階段で私を待ち伏せしている。

わたしの髪の毛の中まで入り込んでくる。

馬車で外出した時だって、そいつを驚かせようと急に後ろを振り向くと——いるのよ、それが。

独特の臭い！ 一体どういう臭いと言ったらいいのか、分析しようと何時間も費やしたこともある。

そんなにひどくはないのよ、最初は。全然きつなくて、むしろ、これまで嗅いだことのある匂いのうちでも一番ほのかな、長続きするものだ。

でも、このじめじめした天気の中ではひどい。夜中目が覚めるとわたしに覆い被さっている。

最初この臭いには動揺させられた。こいつを捕まえてやろうと、家に火をつけることを真剣に考えたほど。

でも、今はもう慣れてしまった。どういう臭いか考えつくものはただひとつ、壁紙の「色」だ！ 黄色い臭い。

この壁にはとてもおかしな跡が、低いところ、幅木のあたりについている。部屋をぐるっと回る一本の筋。長く真っ直ぐで平らな染み、これがベッドを除く全ての家具の後ろにまで入り込んでいる。まるで何度も何度も擦られてきたように。

いったいどうやってきたんだろう、いったい誰がつけたのか、だとしたら何のために？ ぐるぐるぐるぐる、ぐるぐるぐるぐる——目が回ってしまわう！

本当に、とうとう見つけたわ。

夜中にずっと目を凝らしていると、それは大きく変化して、ついにわかった。

表の模様は確かに動く。当たり前だ！ 後ろの女がそれを揺さぶっているからなのよ！

後ろにはものすごくたくさんの女たちがいるように思える時もあれば、たったひとりの女が素早く這い回り、それによって模様一面が揺れている時もある。

そして、とても明るくなっている部分では、彼女はじっとしているけれど、とても暗くなっている部分では、鉄格子を握りしめて激しく揺さぶる。

それに、彼女は始終そこから抜け出してこようとしている。しかし、だれもその模様からもがき出では来れないだろう。模様はすごく強い力で首を絞めるから。そんなに多くの首が垂れ下がっているのは、そのせいだと思う。

女たちは抜け出そうとし、模様が彼女らを絞め殺し、上下逆さまにひっくり返し、白眼を剥かせる。

そのたくさんの首を何かで覆ってやるか、いっそもぎ取ってやるかすれば、まだましなものになるのに。

あの女は昼間抜け出しているんだと思う。どうしてか教えてあげる、こっそりとだけ。見たのよ、わたし！

彼女の姿が全部の窓から見えるの！

同じ女よ。だっていつも這っているから。日の光の下で這う女なんて滅多にいない。

木々の下のあの長い道をずっと這って行って、馬車が来たらブラックベリーの蔓の下に隠れる。

彼女を責めるつもりなんか全然ない。真っ昼間に這うところを見られてしまうなんてすごく屈辱的なことに違いはないから！

わたしは部屋の鍵をかけるわよ、昼間に這うときにはね。夜にはできなもの。なぜってジョンがすぐになにか妙だと疑いだすにきまっている。

ジョンの態度がこのところすごくおかしい。彼をいらいらさせたくないんだけど。別な部屋で寝てくれないかしら！ それに、他の誰にもあの女を引き出すようなことはさせない。

全部の窓から彼女の姿をいっぺんに見られればいいのにとしょっちゅう思う。

でも、できるだけ素早く顔を動かしても、一度にひとつの窓からしか彼女を見ることはできない。

いつも彼女の姿が見えてはいるのだけれど、ひょっとしてわたしが振り向くより速く這うことができるのかも知れない！

時々彼女が広々とした田園風景のなか遙か遠く、激しく吹く風に流される雲の影のようにすごい速さで這っている姿を見たこともある。

上の模様が下の模様から剥がせさえすればいいのに！ やってみるつもり。少しずつでも。

実はもうひとつおかしなことを見つけた。だけど今回は教えない。人を信用しすぎるのもどうかと思うから。

この壁紙を剥がすのに残された時間は二日しかない。ジョンは気づき始めていると思う。わたしを見る彼の目つきが気に入らない。

彼がジェニーに、わたしについて専門的な質問を矢継ぎ早にしているのが耳に入ってきた。彼女はそれにとて良く答えていたわ。

わたしが昼間よく眠っているって彼女は言ってたわね。ジョンはわたしが夜あまり眠っていないことを知っている。わたしはすごく静かにしているのに。

彼はわたしにもあらゆる種類の質問をしてきた。とても愛情深く優しいふりをしている。

彼のことを見通すことがわたしにはできないみたいだね。それでも、彼のそんな振る舞いも無理はない。この壁紙の下で三ヶ月も寝ていればね。

壁紙が関心を惹きつけたのはわたしだけだけど、ジョンもジェニーも密かにその影響を受けていることは間違いない。

ばんざい！ とうとう最後の日が来た。でも今日一日があれば十分。ジョンは今晩ずっと町にいて、夕方まで帰ってこない。

ジェニーはわたしと一緒に寝たいなんて言った——ずる賢い人だこ

と！ でもずっとひとりでいた方が間違はなく良く休めるからと言っ

てやった。

正解だったわ。だって本当はひとりなんかじゃなく、全く！ 月が出てあの気の毒な人が這って模様を揺さぶり始めるとすぐ、わたしは起き上がって急いで彼女を手伝いに行った。

わたしが引っぱり張りが揺さぶり、わたしが揺さぶり彼女が引っぱり、朝になる前にわたしたちは何ヤードも壁紙を剥がした。

まず、わたしの頭くらいの高さ、部屋の半分くらいをぐるっと細長く。

太陽が登ってきてそのひどい模様がわたしを嘲り始めた時、今日こそ終わりにしてやると宣言した！

わたしたちは明日ここを去るので、この部屋で使っていた家具をまた階下に運び下ろして元通りにしてもらっている。

ジェニーは仰天した様子で壁を眺めていたけれど、わたしはこの邪なやつに心底腹が立ってやったことだと彼女に言った。

彼女は笑って、彼女が代わりにやってあげたってかまわない、けどとにかく疲れるようなことになってはだめですよなんて言った。

なんともまあ、本性を表してしまったわね！

でもこのわたしがいるのよ。わたし以外の誰にもこの壁紙に触ることとはなし——そんなことしたら生かしておかない！

わたしを部屋から出そうとしていたわけね、まあ見えてはいるわ！ だけど彼女に言った。すごく静かだがらんとすきれいになったので、もう一度横になったらぐっすり眠れるだろうと思う、だから目が覚めて呼ぶまで、夕食ができて起きこさないでちょうだいって。

だから彼女は部屋を出ていってもういない、使用人たちもいない、いろんなものももう無くなって、釘で打ちつけられたあの大きなベッドと、最初からその上に敷かれていたキャンパス地のマットレスだけが残された。

わたしたちは今晩階下の部屋で寝て、明日船で家に帰ることになる。

すごく楽しいわ、この部屋。また剥き出しの状態になっちゃって。あのこどもたち、よくもこれだけ傷つけたものだ。

ベッドだって齧られまくっている！

でも、わたしも取り掛からなくては。

わたしはドアに鍵をかけ、鍵を玄関先の道に投げ捨てた。

外に出たくない、誰にも入ってきてほしくない、ジョンが入ってくるまでは。

彼を驚かせてやりたい。

ロープを一本持ってきている。ジェニーにも気づかれずにね。もしあの女が出てきて、逃げようとしても、縛りつけておける！

しかし、乗っかるものがないと高いところまで手が届かないのを忘れていた！

このベッドはどうしても動こうとしない！

持ち上げたり押ししたりしたけど、全然力が入らなくなってしまった。すごく腹が立ったので、角のひとつを少し齧り取った——でも歯が痛くなっただけ。

だから、床に立って届く限りの壁紙を全部剥がした。おそろしくべったりと張りついていて、模様はそれを楽しんでいる！あの締め殺された首、膨らんだ眼、よたよた繋がる芽吹いたキノコ、全部揃って嘲りの叫びをあげる。

怒りが込み上げて、なにかやけくそなことをしてしまいそうだ。窓から飛び出すなんて見事だろうな。でも、鉄格子が頑丈すぎてやってみようとすらできないわ。

それに、そんなことするつもりはない。もちろんよ。そんなこと見苦しいし、誤解されてしまうかもしれないのはよくわかっている。

窓から外を見るのが本当に嫌だ——外にはものすごくたくさん女の子が這っている。しかもすごく速く。

みんなあの壁紙から出てくるのかしら、わたしがやったように？でも、わたしはうまく隠しておいたロープでしっかり結えつけられ

ている——だから外の道にわたしを連れ出そうとしても無理よ！

夜が来たら模様の後ろに戻らなければならぬのかもしれないけど、難しいわね！

この広い部屋に出てきて好きなだけ這えるなんて、とても気持ちがいい！

でも部屋の外には行きたくない。行かないわよ、ジェニーがそうしてほしいと頼んでもね。

だって、地面を這わなきゃならないでしょ。それに全部、黄色じゃなくて緑なのよ。

でも、ここでは床をすいすい這えるし、壁にぐるっとついたあの長い染みにちょうどわたしの肩がびったりと合わさってるから、進路を迷うことはありえない。

まあ、ジョンがドアの向こうにやってきたわ！

無駄よ、お兄さん、開けられないわよ！

なんて大声で叫んでいるの、しかもドンドン叩いて！

あら、斧を取ってこいなんて叫んでいる。

こんな綺麗なドアを壊してしまうなんてあんまりよ！

「あなた！」わたしはこれ以上ないほど穏やかな声で言った。「鍵は玄関の階段のそばにあるわ。オオバコの葉の下よ！」

それで彼を黙らせたんだけど、ほんの少しのこと。

彼も今度は本当にとても静かに言った。「なあ、お願いだから開けなさい！」

「だめよ」わたしは言った。「鍵は玄関のドアのそば、オオバコの葉の下！」

同じことをまた、何度か、とても優しくゆっくりと言った。あまり何度も聞かされたので、彼は仕方なく降りて見に行かなければならなかった。もちろん鍵を拾って、部屋に入ってきた。彼はドアのそばで急に立ちすくんだ。

「なんなんだ、これは？」彼は叫んだ。「いったい何をやっているん

だ！」

わたしは全く同じように這い続けていたが、肩越しに振り返って彼を見た。

「どうとう出てきたのよ」わたしは言った。「あなたとジェーンがいたのね。壁紙はほとんど剥いでしまったから、あなた、もうわたしを戻せないわよ！」

あら、この男、どうして気を失わなきゃいけないの？ でも、本当に卒倒して動かない、壁のそばのわたしが這う道の真上でね。だからわたしはそこを通るたび、彼の体を乗り越えて這い進まなければならなかった！

付記

本稿は、Charlotte Perkins Gilman, "The Yellow Wallpaper" (1892) の全訳である。底本としたのは、*New England Magazine* に掲載された一八九二年初出版におけるスプレングの不統一を修正した Small, Maynard & Company による一八九九年のリプリント版である。このリプリント版のテキスト・データおよび書籍全ページのファクシミリは Wikisource 上に公開されている。(https://en.wikisource.org/wiki/Page:The_Yellow_Wallpaper:divu/11)

また、著者のマニユスクリプトと *New England Magazine* 掲載のテキスト異同を網羅したテキスト校訂研究書 Shawn St. Jean ed., "The Yellow Wall-Paper" by Charlotte Perkins Gilman: A Dual-Text Critical Edition (Athens: Ohio University Press, 2006) また、テキスト異同を含む出版の経緯と受容の背景を詳述した Julie Bates Dock ed., "The Yellow Wallpaper" and the History of Its Publication and Reception (University Park: The Pennsylvania State University Press, 1998) を適宜参照した。

この作品にはいくつか先行翻訳があるが、特にそのひとつ、富島美子によるもの(富島美子著『女がうつる——ヒステリー仕掛けの文学論』東京・勁草書房、一九九三年、所収)は優れた訳業であり、解釈に迷う箇所などについて、翻訳テキストを介して仮想的対話をさせていただいたことを申し添えておく。